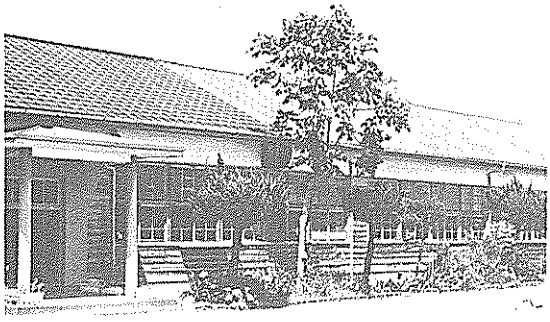
後免野田小を一部増改築

来年三月完成予定

臨時市議会



老朽化などにより一部増改築されることになった後免野田小

臨時市議会が八月七日に開かれ、「後免野田小学校増改築工事請負契約の締結について」「南国市国民健康保険税条例の一部を改正する条例」の二議案が審議され、いずれも可決されました。

後免野田小学校（栗枝利実校長＝児童数三百五十一人）の一部増改築は、校舎の老朽化と不足教室の解消を目的とするもの。

新校舎は鉄筋コンクリート三階建て、延べ千九百五十二平方㍍で、普通教室五、保健室、図工室、家庭科室、図書室、視聴覚室、音楽室、理科室、特別活動室など。本体工事費は二億六千九百万円。

六十二年の開校百周年には新校舎にと、地元でも待ち望んでいたものですが、これで六十二年三月末には、新しい校舎が完成する見込みとなりました。

国民健康保険税条例の一部改正については、国保税の最高額を三十五万円から三十七万円に引き上げたことと、低所得世帯の税負担の軽減を図るため被保険者の均等割、平等割の軽減基準を高めたことにより、六割軽減世帯、四割軽減世帯とも若干ながら税負担が引き下げられます。

銀色有功賞を受賞

～市献血推進会～

七月二十三日、高知市の県民文化ホールで、日本赤十字社名誉副総裁の皇太子殿下をお迎えして第二十二回献血運動推進全国大会が開かれましたが、その席で南国市献血推進会（浦松金吉会長）や市民十一人が銀色有功賞を受賞しました。

これは、三十回以上献血している個人と、二十年以上活動している団体に贈られるものです。

南国市献血推進会は県下で最も長く活動を続けている献血推進団体で、昭和四十一年六月十日、故山本尚一氏を会長に結成されました。六十年度に浦松氏が会長に就任、関係者はこれからもっと運動を盛んにしていこうと張り切っています。

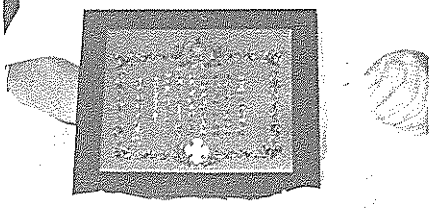
六十年度の南国市民の献血量は二千四百六本（一本二百cc）であるのに対し、使用量は六千三百十五本と、使用量が献血量を大きく上回っている状態です。日本全体では輸血の三分の一を輸入血液に頼っており、そのため、輸血によってエイズに感染するなどの問題も起きています。

自分たちの街で必要な血液は自分たちで補うという相互扶助の精神が浸透し、その運動が全国に広がれば、血液の輸入という問題は解決します。

現在、県下全般に、公立高校での献血があまり積極的に行われていません。これは全国でも高知県だけに見られることです。このため、若い人に献血意識が浸透せず、高齢者の献血が中心になっています。市でも企業や国・私立学校での献血が中心になっています。

市献血推進会では、今後広く地域住民に献血を訴えかけ、地域に出て小規模でも街頭献血に取り組んでいくことを目標にしています。

その初めての取り組みとして、今年の五月に日章地区と大篠地区の皆さんに献血を呼びかけたところ、三十人＝五十数人の方が協力してくれました。浦松会長は「今後もこうした動きが広がっていくように」と希望しています。



地域ぐるみの献血を進めていきたいと話す浦松会長